大谷知新

――石の営みによって生まれた地域資源の再編――

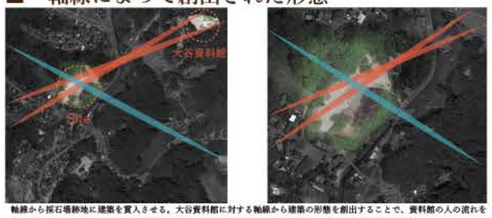
石は生きている。

ひとの一生とは比べられないほど長い年月を重ねながら生きている。
大谷石は数ある石の中でも人間的な尺度の時間軸を生き、
ひとの手が加わることで様々な形を経て、ひとにより最期を見届けられる。

そこはかつて石が生まれる場所として「生」
産業遺産となった今、町から取り残されている。

かつての石の潤いは戻らない、
採石場跡地に残り今も生き続ける石の脈動を伝える。

■　軸線によって創出された形態



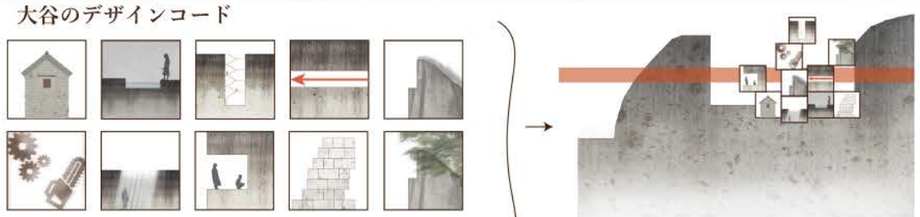
軸線から採石場跡地に建築を貫入させる。大谷資料館に対する軸線から建築の形態を創出することで、資料館の人の流れを呼び込み新たな大谷の流れを作り出す。岩山を貫く軸線は稲荷山を見守ってきた稲荷神社の参道に繋がる。
かつては１つの山であった岩山同士を結ぶものへと形態を与える。

■　大地に刻む建築　地層博物館

軸線によって生まれた形態に沿って大地を掘り込む。この操作は新たに地層を露出させることで、石の脈動を直接岩肌に触れて体感する空間を生み出す。
この博物館が今現在、そしてこれからも大谷は石を採り続ける意思表示とする空間へとなる。

大地　→　大地を掘り込み空間が生まれる　→　採掘時に生まれた大谷石は舗装材や化粧材に使用される

■　大谷のデザインコード



大谷という大きな力を持った敷地に対してその場所のデザインコードを取り入れることで
自然と対峙しながらもその場所に調和する建築へと変化していく。

「再構築」

■ 石と共に時を刻む鋼材

石の時間軸とは異なる時間軸の中で変化するコールテン鋼（耐候性鋼）。
採石場では様々な機械や加工場などが鋼材によってできている。現在その多くが経年変化によって錆ついている。
コールテン鋼を用いることで昔からその場に存在していたかのような装いを与えながらも、時間とともに変化していく姿を石と共に体感できる。

■ 直線の動線から派生する建築空間

大谷の垂直平行な岩の断面から直線的な動線を取り込む。
動線はヒューマンスケールにスケールダウンすることで
採石の壮大さを強調する。

Section　S=1:400